

近代文学研究叢書

第五十三卷

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書
第五十三卷

昭和 57 年 5 月 10 日 印刷

昭和 57 年 5 月 20 日 発行

〔定価 4800 円〕

著 者	昭和女子大学近代文学研究室
発 行 者	東京都世田谷区太子堂一―七 石 津 純 道
印 刷 所	大文堂印刷株式会社
発 行 所	東京都世田谷区太子堂一―七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座 東京四一―七〇八六七 電話 (03) 五 一 三 一 八 番

近代文学研究叢書



金子元臣
(1868・12・1～1944・2・28)

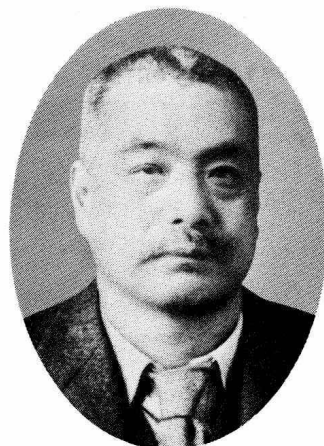


三上於菟吉
(1891・2・4～1944・2・7)

(友利美津氏蔵)



高安月郊
(1869・2・16～1944・2・26)



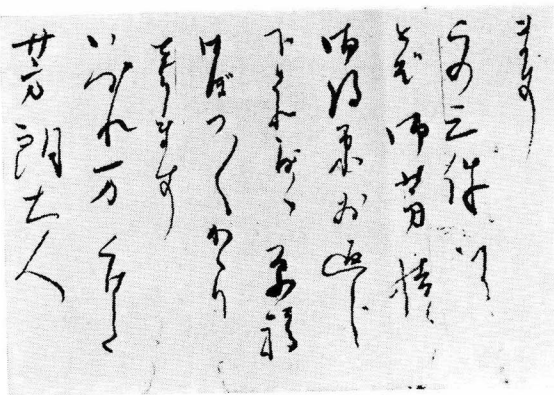
中里介山
(1885・4・4～1944・4・28)

53
卷



村上浪六
(1865・11・20～1944・2・1)

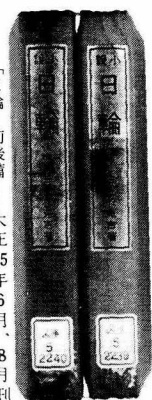
三上於菟吉



筆跡（門川正雄氏藏）



「雪之承変化」 東京朝日新聞
昭和9年11月7日
（昭和女子大学蔵）



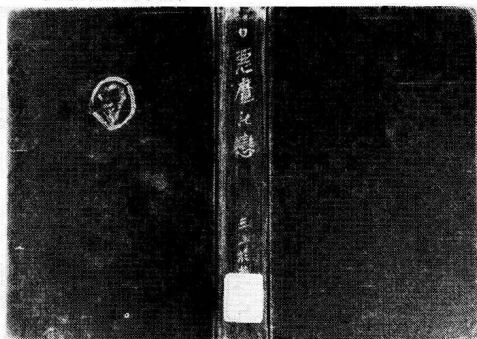
「日輪」前後篇——大正15年6月、8月刊
（昭和女子大学蔵）

「三上於菟吉全集」全12巻 昭和10年7月—11年6月刊



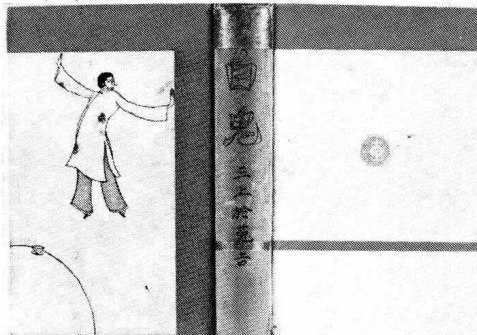
（昭和女子大学蔵）

(昭和女子大学蔵)



「悪魔の恋」 大正11年3月刊

(三康図書館蔵)



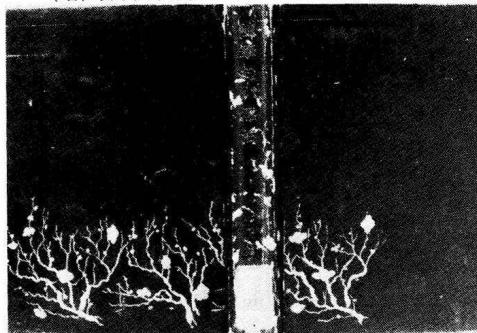
「白鬼」 大正14年12月刊

(昭和女子大学蔵)



「天誅組」 昭和9年10月刊

(昭和女子大学蔵)



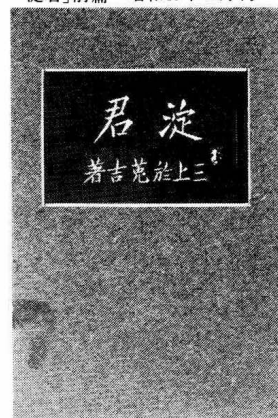
「随筆わが漂泊」 昭和10年6月刊

「春光の下に」 大正4年8月刊



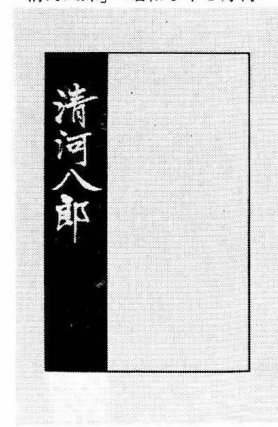
(昭和女子大学蔵)

「淀君」前篇 昭和49年9月刊



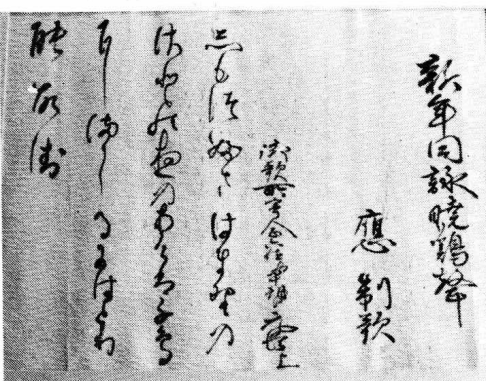
(昭和女子大学蔵)

「清河八郎」 昭和6年4月刊



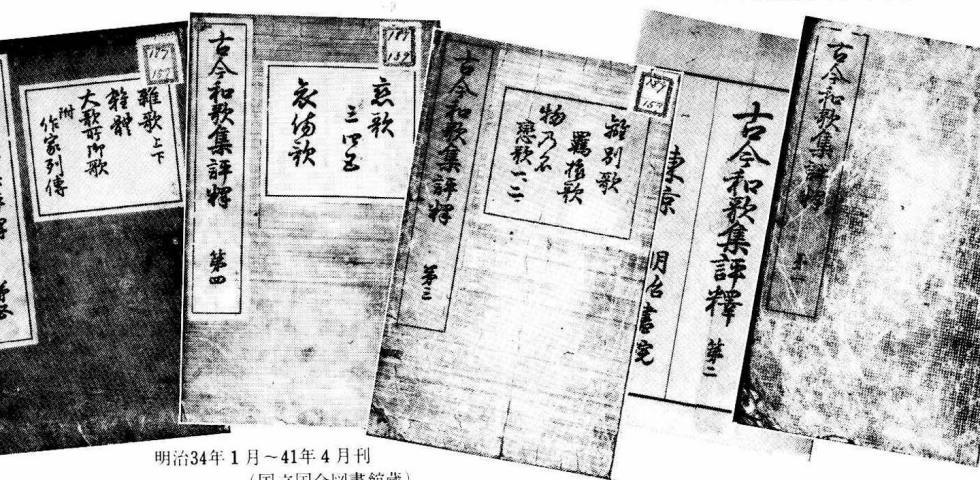
(昭和女子大学蔵)

金子元臣

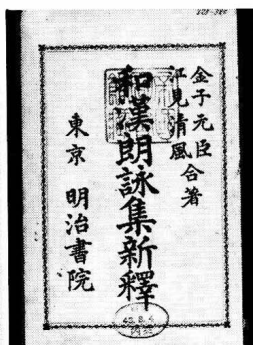
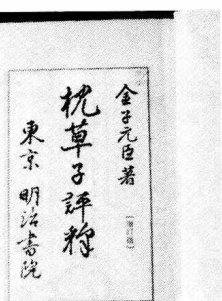
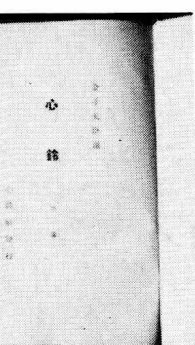


筆跡 昭和7年勅題詠進歌

「古今和歌集評釈」全5冊



明治34年1月～41年4月刊
(国立国会図書館蔵)

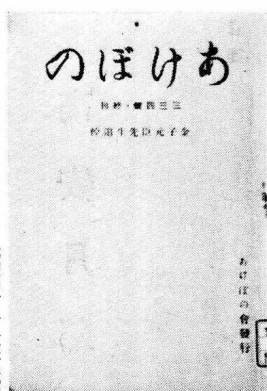


「枕草子評釈」増訂版
大正15年6月刊
(昭和女子大学蔵)

「和漢朗詠集新釈」
明治43年8月刊
(国立国会図書館蔵)

「歌学」創刊号
明治25年3月
(昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)



金子元臣先生追悼
雑誌「あけぼの」終刊号
昭和19年7月刊

「定本源氏物語新解」上・中・下巻



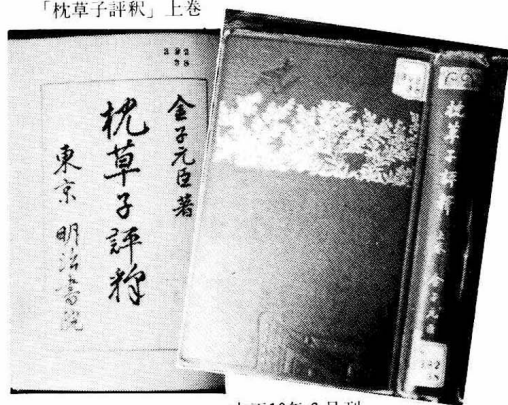
大正14年9月～
昭和5年3月刊

(昭和女子大学蔵)



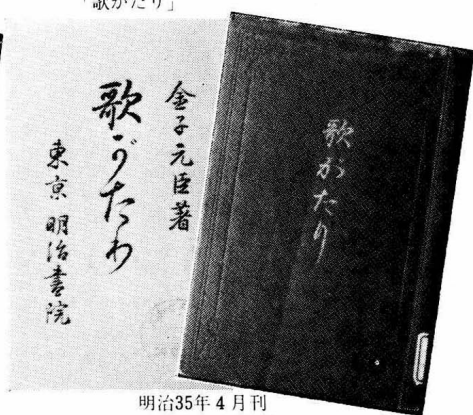
「万葉集評釈」全4冊
昭和10年11月～20年1月刊

「枕草子評釈」上巻

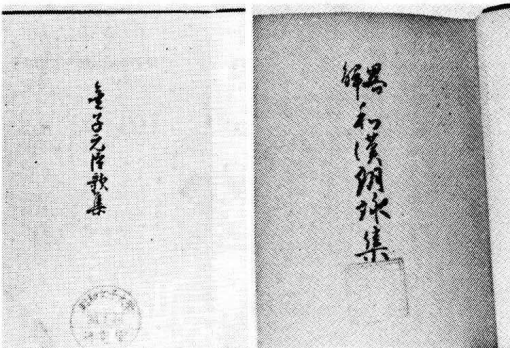


大正10年6月刊
(昭和女子大学蔵)

「歌がたり」

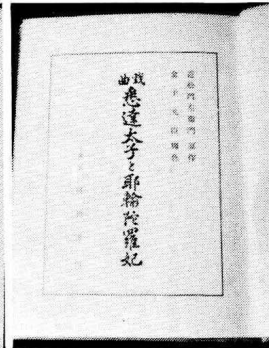


明治35年4月刊
(昭和女子大学蔵)

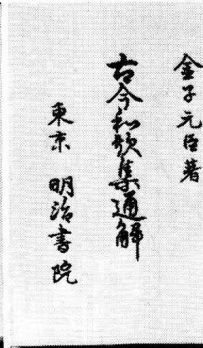


「金子元臣歌集」
昭和20年2月刊

「略解和漢朗詠集」
昭和18年3月刊



「悉達太子と耶輸陀羅妃」
昭和9年12月刊



「古今和歌集通解」
昭和9年4月

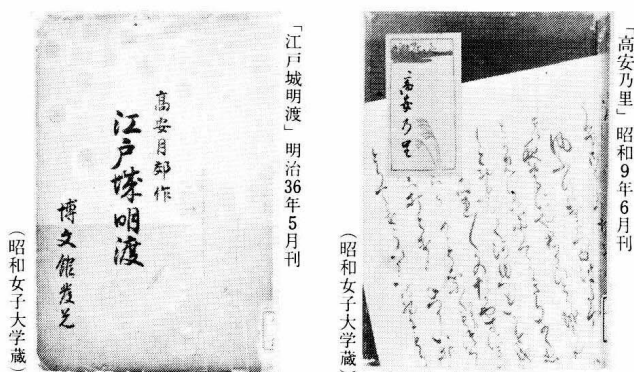
高安月郊

筆跡

昔は我が野々煙々たる。吾は一
 廊よりつゞつて大に居暗い。我は黒い
 には方々居居る。是より移るある
 あり。と云々。かたは居居る。但し
 相はぬ。消るゝ。相より思ふは
 水々たる。我である。我は水を

己ありて半保く、半保り至馬がゆく
なり、水子か、船子つては、女はんをぬ
るまゝかり、一へ初水、そのまゝあり高く
はなして入、水をこつとび、煙うあつて、内
ろてゆく。
水の底もふたふたわづらひ、海へたまに

(弘田ゆり子氏蔵)

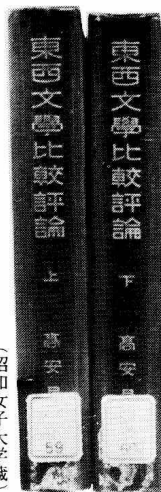


「東西文芸評伝」昭和4年6月刊
(昭和女子大学蔵)

「金字塔」 明治33年6月刊
(昭和女子大学蔵)

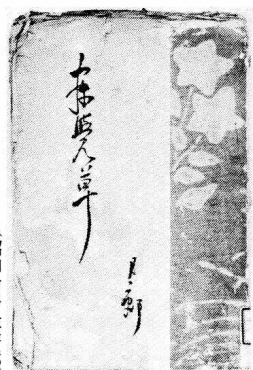
「夜涛集」 明治33年12月刊
(昭和女子大学蔵)

「東西文学比較評論」 大正5年5月刊



(昭和女子大学蔵)

「寝覚草」 明治39年6月刊



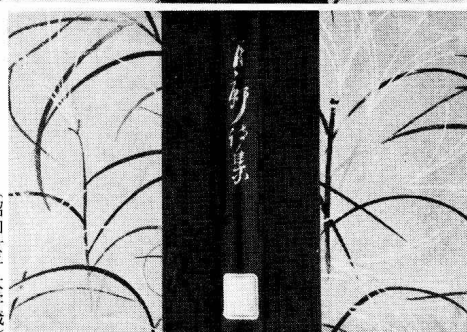
(昭和女子大学蔵)

「月郊脚本集」 大正5年10月刊



(昭和女子大学蔵)

「月郊詩集」 大正7年10月

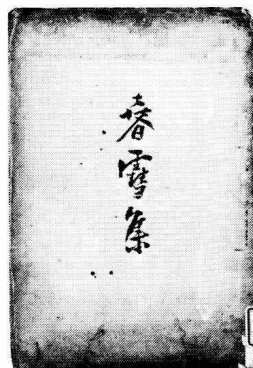


(昭和女子大学蔵)

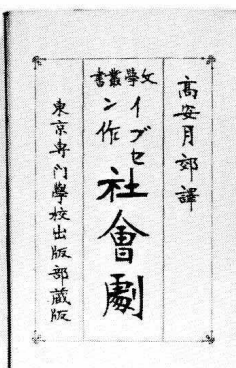
「月郊集」 大正6年6月刊



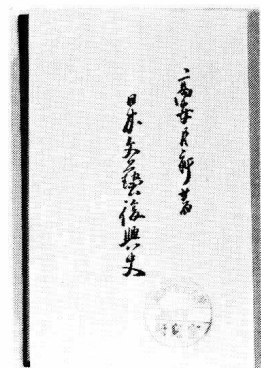
(昭和女子大学蔵)



「春雪集」 明治36年3月刊
(昭和女子大学蔵)



「イブセン作 社会劇」

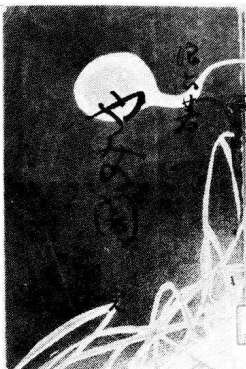


「日本文芸復興史」

昭和4年6月刊 (昭和女子大学蔵) 明治34年10月刊 (昭和女子大学蔵)



「八軒長屋」続篇
明治41年8月刊
(昭和女子大学蔵)



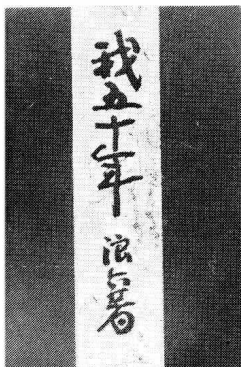
「やみの闇」
明治35年8月刊
(昭和女子大学蔵)



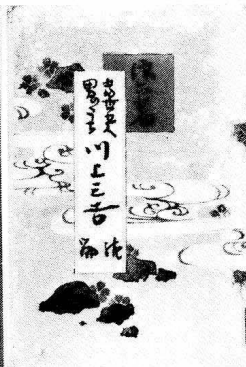
「後の三日月」
明治28年7月刊
(昭和女子大学蔵)



「夜の嵐」
明治26年7月刊
(昭和女子大学蔵)



「我五十年」
大正3年12月刊
(昭和女子大学蔵)



「当世五人男のうち川上三吉」
明治36年11月刊
(昭和女子大学蔵)



「大坂城」
明治29年9月刊
(昭和女子大学蔵)



「浪六漫筆」
明治26年11月刊
(昭和女子大学蔵)



「人の垢」
大正5年5月刊
(昭和女子大学蔵)



「日蓮」
明治41年12月刊
(昭和女子大学蔵)

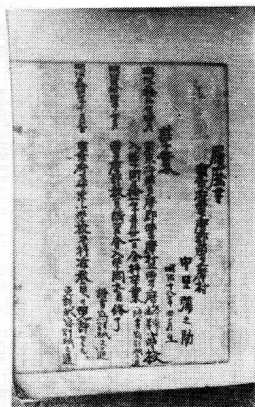


「赤蜻蛉」
明治33年9月刊
(昭和女子大学蔵)

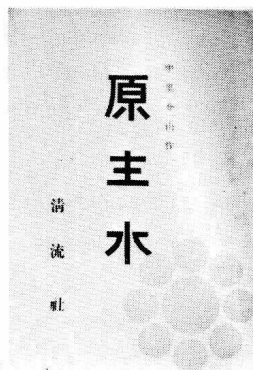
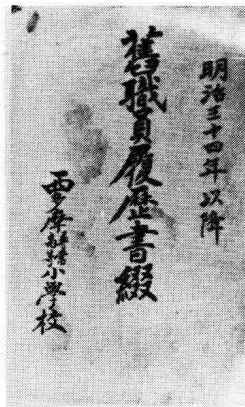


「安田作兵衛」
明治27年11月刊
(昭和女子大学蔵)

中里介山



履歴書 (宮沢蔚氏蔵)



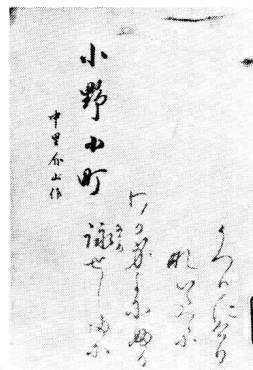
「原主水」

明治44年9月刊
(中里敏朗氏蔵)



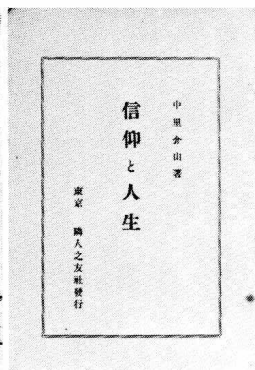
「トルストイ言行録」

明治39年7月刊
(中里敏朗氏蔵)



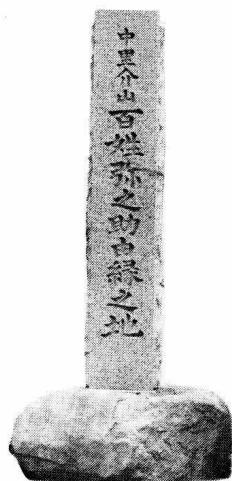
「小野小町」

昭和8年8月刊
(昭和女子大学蔵)



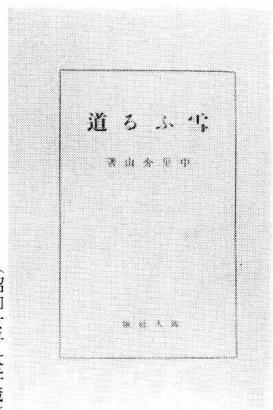
「信仰と人生」

昭和8年6月刊
(昭和女子大学蔵)



生地記念碑
東京都西多摩郡羽村町

「雪ふる道」昭和11年12月刊



(昭和女子大学蔵)

特装版「大菩薩峠」第一冊 昭和4年9月 春秋社刊

(近代文学館蔵)



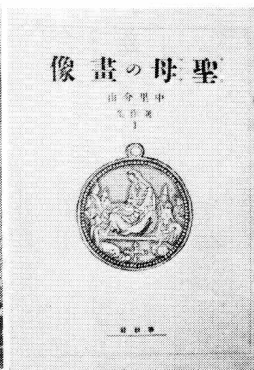
「切支丹夜話」

昭和7年11月刊
(中里敏朗氏蔵)



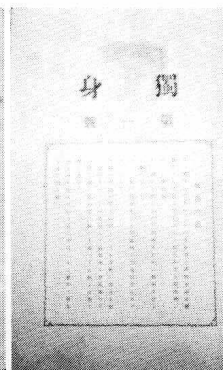
「夢殿」

昭和5年2月刊
(昭和女子大学蔵)



「聖母の画像」

大正13年3月刊
(中里敏朗氏蔵)



「独身」第1号

明治45年7月刊
(中里敏朗氏蔵)



「浄瑠璃坂の仇討」

昭和29年8月刊
(昭和女子大学蔵)



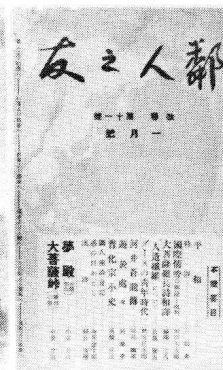
「黒谷夜話」

昭和24年6月刊
(昭和女子大学蔵)



「峠」第7号

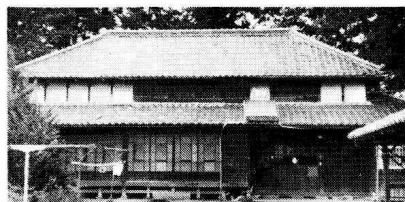
昭和11年7月刊
(宮沢蔚氏蔵)



「隣人之友」改卷第11

昭和9年1月
(宮沢蔚氏蔵)

遺跡をたずねて



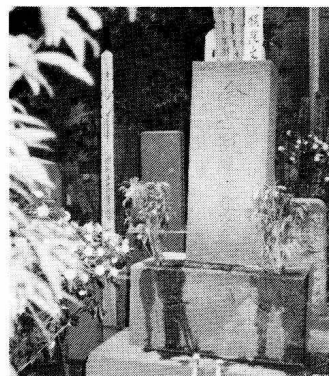
三上於菟吉生家（母屋のみ解体し再建）
埼玉県、杉戸町大塚（現 吉田氏宅）



三上於菟吉終焉の家（現、柏木氏宅）
埼玉県春日部市8丁目



三上於菟吉墓所（埼玉県）



金子元臣墓所 高源院（東京都）



村上浪六墓所 多磨霊園（東京都）



中里介山墓所 禪林寺（東京都）



高安月郊墓所 染井霊園（東京都）

目次

口 絵		一
叢書の成立		一四
凡 例		一七
三 上 於 菟 吉		一九
金 子 元 臣		一〇三
高 安 月 郊		一七三
村 上 浪 六		二四一
中 里 介 山		三三三
PERSONALITY PROFILES		三三三
卷 末 付 記		四二〇
第五十二卷年表補遺		四四二
索 引		四七四

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて二十八冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社を興こして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の長大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の実地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢